

「歩み。」これまでそしてこれから

高知県大川村教育長 山中 昌範

新たな元号「令和」が始まり、大川村も新しい時代を見据えた振興施策と次代を担う人材育成に力を入れた取り組みが動き始めた頃、新型コロナウイルスの感染が全国規模となり、その影響は、過疎の大川村の生活にも大きな変化をもたらしています。小・中学校では三月上旬から臨時休業の措置を取り、学校の一大行事でもある卒業式、入学式も規模を縮小して行わざるを得ない状況となりました。人口の少ない村だからこそ留学生を含む村の児童・生徒が行う発表会や節目を祝う行事には多くの村民の方々が出席し、共に喜び合う事が自然であった大川村の住民にとっては物足りなさや寂しさを感じる状況となりました。

新しい年度が始まって学校も臨時休業措置を行わざるを得ませんでしたが、七年前からICT機器の活用に取り組み、六年前からは一人一台のタブレットPCを配置し、授業や家庭で

の利活用の取り組みを行っていることで、休業期間中においても自宅（留学生はセンター）で授業時間の設定に基づいた教科の学習や健康状況の確認を行い、大川村だからこそできる教育が実践できました。

せっかくの機会ですので、離島を除いて日本で一番人口の少ない大川村の事を少しご紹介させていただきます。かつては日本三大暴れ川のひとつ「四国三郎吉野川」と評された吉野川の水源地域に位置し、山深い森林が育む水量が豊富で自然豊かな山村でしたが、現在では四国の水瓶「早明浦ダム」の湖面を抱える過疎の村となっています。昭和四十七年に完成した早明浦ダムによる村中心部の水没と西日本でも有数の銅の採掘鉦山であった白滝鉦山しらたきじょうざんの閉山が時期を同じくして発生し、昭和三十六年には四千三百人強であった村の人口は、この二つの要因が発生した後は千人を切るまでの急激な人口減少となりました。そんな状況を打破する為に、大川村では昭和六十年を「村興し元年」と位置づけ、白滝鉦山跡地の開発に取り組みしました。計画の中には教育の重点項目として「山村留学」への取り組みが位置づけられており、二年後の昭和六十二年度から「大川村ふるさと留学」の運営が始まりました。

当時私は、大川村役場の職員として産業関係の課に配属をされましたので、現在の留学センターのある場所が、閉山後の荒廃した廃屋の姿から新たな村の命運をかけた施設へと整備

され、廃屋の立ち並ぶ集落に新たな事業所も開設され、事業所職員を始め村に移住する家族の生活が始まると共に、多くのふるさと留学生の声が聞こえる集落へと移り変わる様子を見てきました。ふるさと留学生は、私の息子達を始め、村で生まれた子どもたちにとっては幼い頃から絶えず一緒に成長してきた人間関係に変化を与え、コミュニケーションの取り方に多くの子どもたちが悩みながら生きる力を身につけ、大きく成長したと感じています。そんなふるさと留学は、開始当初から現在に至るまでに、過疎化の影響で里親方式からセンター方式へと変化をし、平成二十一年度に新たな留学センターが建設され、育てる会の派遣指導員の配置並びに専任の留学指導員の採用も行った事で、現在では子どもたちにとっても充実した体験活動の実施や適切な生活指導が行われています。

職員時代に、私も教育委員会事務局に配属された時は、月に数日は日中事務局で事務を執り、留学生が帰寮する前にはセンターに入り生活指導を行い、翌日は事務局の事務を執るという業務を行ったこともあります。当時の留学生に十分な指導が行えたとは思っていませんが、嬉しいことにその当時の留学生が、現在村に帰ってきて働いています。

現在、教育長として留学生に話をする機会がありますが、言葉の奥にある本質を見極めようと輝く瞳を向けて話を聞く姿には何時も気を引き締めさせられ、子どもたちの満足を得るに

は、本村の留学に関わる全員が、子どもたちに向き合い相互理解を得た上で成長を促す取り組みが大切だと感じています。

今後も、卒業した留学生が大川村を第二の故郷と思える活動をさらに進め、村の自然、指導者や村民の方々が留学生にとって「帰りたい場所、会いたい人」という思いが、事ある毎に脳裏に浮かぶそんな大川村ふるさと留学とすべく、制度に携わる一人として子どもたちとの関わりを楽しむ事を大切にして進めて行こうと考えています。

やまなか・まさのり.....

高知県大川村出身 高知県大川村教育長。元大川村役場職員、教育次長・総務課長・事業課長を経て平成二十四年より現職。